

言葉と文字の不思議な特徴を題材とした小説に中 <sup>なかじまあつし</sup> 島 <sup>もじか</sup> 敦 の『文字禍』があります。

舞台は古代アッシリア王国の図書館。夜な夜な聞こえる不思議な話し声の原因を調査することを命じられた老 <sup>ろうはかせ</sup> 博士は文字の <sup>れい</sup> 霊 <sup>しわざ</sup> の仕業ではないかと考えます。そこで最近文字を覚えた人々にその前後で変化したことはないかと聞き取りをします。また老博士自身も一つの文字を長い間見つめ続け、その正体を暴こうとし、文字が解体して単なる線の寄せ集めにしか見えなくなる。という不思議な経験をします。

この小説が物語っているのは、言葉や文字はあくまで何かを伝達するための手段、媒体であり、その物自体ではないという事でしょう。例えば「火」と表現したからと言って、口や紙が焼けてしまうことはありません。言葉や文字には使う人の経験、思いなどが包み込まれているものなので、表現は同じであっても人それぞれに少しずつ違った内容を載せて伝えていきます。従って完全にその内容を語り尽くすことはできないのです。

仏教ではこのスタンスに立ち、言葉や文字に対して常に警戒を怠らない態度を取ります。「初めに言葉ありき」で始まる新 <sup>しんやくせいしよ</sup> 約聖 書の揺るぎない信頼性とは対極にあると言えます。しかし私達は言葉や文字無しでは日常生活を営むことは出来ませんし、実際人類をここまで発展させ、社会を動かし続けているのもこの言葉や文字の力であると言っても過言ではありません。

<sup>どうげんぜんじ</sup> 道 <sup>しょうぼうげんぞう</sup> 元禅師は『正 <sup>どうとく</sup> 法 眼 蔵』「道得」の巻で、言葉や文字の不安定さを前提としつつも <sup>ぶっぼう</sup> 仏 法を伝えるために、その場、その場に依じて絶えず新鮮な表現を発信し続けることを求めます。仏法はその絶えざる発信によってのみ実現され得るものなのです。

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

さて現代は言葉や文字を通じて情報が洪水の如く押し寄せてくる時代です。最初にご紹介した小説『文字禍』の結末では、老博士が「この国は文字の靈に 蝕<sup>むしば</sup> まれており、即 刻<sup>そつこく</sup> 文字<sup>もじ</sup> に対する崇<sup>すうはい</sup> 拝<sup>はい</sup> を改めて下さい。」と王に陳<sup>ちんじょう</sup> 情<sup>じょう</sup> します。するとその後間もなく地震が起こり、老博士は文字の刻まれた当時の本である粘土板<sup>ねんどばん</sup> に押しつぶされ命を落としてしまいます。これが文字の靈の呪いであったかどうかは定かではありません。

翻<sup>ひるがえ</sup> ってこの小説は洪水の如き言葉と文字に 罅<sup>ほんろう</sup> まれ、それに翻<sup>ほんろう</sup> 弄<sup>ろう</sup> されながら 無<sup>むとん</sup> 頓<sup>ちやく</sup> 着<sup>ちやく</sup> に使い続ける現代の私達の姿を何か暗示<sup>あんじ</sup> しているように思えます。私達も言葉や文字に対して自覚的になると共に、時にはそれから離れる時間を持つことも大切なのかもしれません。

曹<sup>そう</sup> 洞<sup>とう</sup> 宗<sup>しゅう</sup> が大切にしている坐<sup>ざ</sup> 禅<sup>ぜん</sup> はそんな時間を私達にもたらし、改めて言葉と文字の重みに目を向け直させてくれるきっかけを与えてくれるはずです。

— 終 —